疾風の軌跡

的中青矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
疾風の軌跡

【Ｎコード】
Ｎ４２３３Ｖ

【作者名】
的中青矢

【あらすじ】
蒼き流星の登場人物、カイ。彼は2年前、ひょんなことがきっかけで人を殺してしまう。そして崩れてしまう彼の日常。孤児同然となった少年は、やがてある街の路地裏に住むことにした。誰にも会わない、そう思っていた彼の元へ1人の少女が現れる――。季節は秋、この話はカイがＫ都にいくまでの1年半を描いた小説。それまで、彼はどういった生活を送っていたのだろうか？

出会い（前書き）

どうも、的中青矢です。初めての人ははじめまして。久方ぶりの人はお久しぶり。

この話は前作「蒼き流星」のオリジナルキャラクターの1人、カイのお話です。前作を読まれていない方は少々きついと思われますので、もしよろしければ連載中で前作を読んでなくても読める「蒼き流星　大地の恵み」をご覧になってください。

前作を読んでもなんでこうなったか思い出せないよ！　って方はこのURLを

ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｕｓｅｒｎｏｖｅｌｄａｔａｍａｎａｇｅ／ｔｏｐ／ｎｃｏｄｅ／８９６６５／ｎｏｖｅｌｄａｔａｉｄ／４７３３１１／

これを読んでからのほうがいいかと思います。

それでは、御自分のペースで読書なさってください

出会い

その日は少年にとって運悪く天気は最悪だった。もしかしたら雨天の日を悪い、と思う人が多かったりするかもしれないが、少年にとって好き嫌いの範疇ではない。寒いかどうかという話だ。

その少年はボロ雑巾のような服を纏っていた。所々に裂け目が出来ており、ちらりと見える肉からは裂傷や痣が見られる。まともな生活をしていないようだ。

こけた頬とぼさぼさの銀髪の髪、端から見てもそれはまぎれもない「家のない子」だった。この時代においてそんなものは珍しいが……しかし存在するのもまた事実だ。

ザーザーと降る雨をどこからか拾ってきたダンボール――この時代ではもはや希少価値が高い――で防ぎながら少年・カイは思う。

（なんで自分は生きているんだろう……）

カイはある咎を背負っていた。その咎のせいで家も家族も全てをカイは失った。「普通」の子ではないからと言われて。

正当防衛、その基準を満たしてはいた。数ヶ月前の彼は家に押し入ってきた強盗を後ろから木刀で一撃でいとも簡単に殺した。殺す気は――あった。

だって両親を助けたかったから。だって笑って暮らせる日常を壊されたくなかったから。だから殺すしかないと思った。しかし

（それで自分が日常を壊しちまうなんて……）

あのときのカイは夢にも思っていなかった。たった1人の人間を殺すことがいけないことを分かっている。けれどそれで救えるなら安い代償だと考えていた。犯罪には問われなかった。

犯罪ではなかったが、罪だった。ただそれだけの話だった。悪いのは誰でもない。ただゴミを避けるのと同じように、カイを避けたというだけの話、親さえも。

（馬鹿みたいじゃねえか……？）

あの時、何故自分の親がカイを遠ざけ始めたのか。それは人を殺したから、と最近までは思っていた。しかしこうは考えられないかという説もある。

――人を殺したのに、あのときの自分は笑っていた。

親を救えたことへの歓喜のせいで。飛び跳ねた少しの血を服に汚したままで笑っている少年は、さぞかし悪魔のように映ったことだろう。実際当時担当していた刑事も顔を引き攣らせていた。

（ああ、死にたい……）

この数ヶ月何度も何度も思ったけれど、未だにカイは死なずにいた。恐いのだ。誰にも看取られずに死ぬことが。

（この世に神様がいたなら本当に心から思うよ。……なんであああいう運命に仕組んだんだよ）

あのとき偶然に強盗が入ってきて、偶然強盗がこちらに背を向けていて、偶然自分が木刀を上手く振れる人間で、偶然殺してしまった。その巡り会わせを、もし神様が仕組んだというのなら、カイは一生かかっても神様に復習するだろう。

ぐぅ、とカイの腹がなる。ここ一週間くらい食べ物をろくに食べていない。今時残飯処理も適度に済まされているがために漫画みたいに奪い取ろうとしたがそれも無理だった。

（もう、嫌だよ……）

雨に混じってカイの瞳から涙が落ちる。数ヶ月前、ある大会で屈辱的な敗北をしたときに流したものとは違う。単純に悲しかった。

真っ赤に目を充血しながら、鼻水も気にせず流す。どうせ誰も見ていないし、ここ数ヶ月でそんなマナーも気にしなくなってしまった。

そんなとき、かつっと靴の音がカイの鼓膜を揺さぶった。

今更だがここはどこかの薄汚い路地裏だ。それゆえに誰からも見られることもない。たまに不良が溜まってくるかもしれないというだけだ。しかし不良ならば数も多いはずだし、何より気持ち悪い笑みと一緒にやってくる。

しかし今回は1人のようだ。

（……誰だ？）

だがカイに見当がつくはずもない。彼がここに来てからまだ1週間だ。ここらへんの地理もよく理解していないし、何より知る気もない。食べ物が分かったのならすぐに他の場所へ移る気だった。

かつっという音は徐々にカイのほうへと近づいていった。もしかして自分のような人間が――と思ってすぐに否定する。そう簡単に正当防衛で殺人が起こってたまるか。もしそうならばカイだってもう少しマシな道を辿っていたはずだ。

ならば家出してきた誰か？　それならまだ現実味はある。そしてここに住処を作ろうとしているのではないか。追い返したほうがいいかもしれない。

しかし、同時に誰か同じようにここで暮らすような人間が欲しいともカイは思っていた。やはり孤独というのは悲しい。人間の本能から、1人の生活というのは辛すぎる。

だったらここら辺に住むなら歓迎してあげようと思っていた。2

人で協力すれば食べ物も手に入るかもしれない。
かつっ、音はもうすぐそこまで来ていた。ここまで来るとカイも雨にぬれるのも構わずダンボールの屋根から出てどんな奴なのかを確認した。
目立つ真っ黄色の傘、それを握る小さな手、肩まである瑞々しい黒髪、家出してきたとは全く思えないほど綺麗な顔、そしてカイを見つけて輝く瞳。どこからどう見てもよい育ちの女の子だ。
全く知らない顔だった。どこのどなたですか？　と思わずカイは訊いてしまおうになる。カイの小学校の同級生にそんな外見をした人間はいなかった。
その少女はカイの目の前までやってくると、ゆっくりと微笑んだ。何微笑んでいるんだこいつ、反射的にカイは眉をひそめた。

「うわっ、そんなに露骨に怖い顔しないでよ」

そりゃ初対面でいきなり笑ってくるからだ。内心でそう思いながらしかし何故こんな良い人そうな奴がここに来るのだろうと疑問に思った。理解が出来ない。

「君さ、もしかして家とかない？」
「……だったら？」

内心で家がないとか言われてカイは動揺したが、それでも平然と答える。いきなりそんなことを訊かれるとは思わなかった。まるで、心を見透かされているようだ。

「食べ物とかも無い？」
「ないな」
「ここ以外に寝泊まりする場所は？」
「あるわけないだろ？」

やっぱりそうだよね、と微笑む少女。その笑みがカイを憤らせた。他人の不幸を笑うサディストなのか？　自分より生活の厳しい人間を笑う貴族気取りなのか？　けれどカイの予想は大きく外れてしまう。

「じゃあさ、うちに来ない？」

「……はぁ？」

その問いに思わずカイは思わず素っ頓狂な声を出してしまう。「ちょっとうちに来て遊ばない？」みたいなノリだが文脈からしてそんなわけがない。寝泊りする場所が無いならうちに泊まっていけよと言っているのだ。

「……からかっているのか？」

「いやいや、本気だよ私は」

まっすぐな瞳でそう答えられカイは思わず黙ってしまう。というか状況を未だに理解できずにいた。

「もし来るきなら、この手を掴んで？」

そういって差し出された端正で小さな手。不覚にもカイはこんな手を自分の汚い手で汚したくないなとか考えてしまった。

その数分後、カイはどうするべきかと頭をフル回転し、最終的にその少女の手を掴んだ。体重の軽くなったカイは少女の細腕でも充分に立ち上がらせるほどで、無理矢理カイは立たされた。

「ああ、そうそう。一応自己紹介していなかったね。黄璃光、ここの近くに住んでいる小学４年生です」

へぇ、と思わず呟くカイ。しかしマナーを忘れてしまった少年は自分も名乗ることを忘れてしまっていた。

「……あなたは？」
「お、俺？」
「他にいないでしょう？」

君って面白いね～と笑う黄璃。黄璃に笑われるのが何か癪だったのですぐに答えた。

「俺は……甲斐疾風（カイハヤテ）」

こうして、全てを通り抜けてしまう風と、全てを照らし出す光は邂逅した。後にカイは思う。これが神様の巡り会わせなら、中々に面倒なことをしてくれたなと。

季節は秋、この少年少女の出会いが約半年後に起こる「宇宙規模」の大事件にも影響していくことは、この2人にもわからないことだった。

出会い（後書き）

感想はいつでもお待ちしております！　このサイトのユーザーの方でなくてもかけるのでぜひ書いてください。それによって僕の執筆の早さが変わってきますので。

「うむぐぐぐぐぐぐぐぐっ……！」
「いや、そんなに急いで食べないでいいからね！？」

カイは黄璃に連れて行かれ彼女の家――というか保育園なみに広い――で夕飯をご馳走になっていた。

カイの胃袋はからっからの状況が続いていていきなり多くの量を食べてしまえばいろいろと大変なのだが……ありえないくらいの量に彼は挑んでいる。

「うまっ……ってか量がいい！」
「それ、別においしくなくてもいいって言ってるんじゃないの……？」

嘆息しながらも黄璃はそのカイの食いっぷりに半ば笑っていた。この料理を作ったのは彼女だ。目の前でこんなにもうまそうに――ただ料理を口に運んでいるだけのように見えるがそれでも嬉しいのだろう。

五人前の料理を一気にかきこみ、次に特大ハンバーグに手をかけようとしたカイだがそこでギブアップだった。どうやら本能で食べていたらしい。げふっ、と満腹のときに出されるあれが出された。

「ほら、無茶するからそうなるんだよ？」
「い、いや大丈夫……目の前に料理があれば俺はいくらだって食えるんだ」
「それは無いと思う」

冷静に突っ込みを入れながら倒れそうになるカイの身体を黄璃は

必死に受け止める。

（……軽い）

何日も食べていないことは黄璃も見ただけでわたっていた。しかし実際に持ってみると本当に軽い。皮と骨だけしかないといわれるかもしれない。実際カイより背の小さい黄璃よりも軽い。

（……この子は何があったんだろう）

今まで黄璃はいろんな子供に触れてきた。親と喧嘩して家出した子、旅に出て途中で倒れていた子、迷子になった子、道路で泣き叫んでいた子、そして親に捨てられてしまった子、その子供達と関わり励ましてきた。しかしカイからはそのどれとも違う匂いを感じている。

（とにかく、ここで倒れさせちゃまずい）

そういって倒れそうになるカイを椅子に座らせる。しかし椅子に座っているのはきついらしく顔を歪めている。

「何、きついの？」
「……気持ち悪い。吐きそう」
「そりゃそうだ」
「……横にさせて」
「……分かった」

そういってカイの肩に腕をかけてまずは立ち上がらせる。それからソファーのあるところへと移動させ、寝かせた。すると寝かされた衝撃で1度はきつい表情をうかべたカイだが、ゆっくりとそれは

和らいでいった。

「……悪い」

「どういたしまして。それにしてもよく食べたね。一応２０人分の子供達の分作ったけど半分はもっていかれちゃったな」

苦笑気味しながら黄璃はカイの疲れた表情を見る。荒れ果てたその肌、手のとおっていない髪、虫が寄ってくるのではないかという悪臭、とにかくカイは最悪だった。

「……カイ、君って家どこ？」

「……なんでそんなこと訊くの？」

「両親が心配しているなら送ってあげようかと思って」

「俺のことを両親は心配してないよ」

その返事に黄璃はそっかと答えるだけだった。普通ならその問いに「何故？」と答えるだろう。しかし黄璃はそれをしなかったから。黄璃はそう答える子供達を何人も見てきたから、大方予想もついているし、本人が言いたくないのも汲み取ったのだ。

「……訊かないの？」

「訊いて欲しい？」

「……いや、いいや。ありがと」

そういうカイの顔はほっとしていた。何故かという疑問よりも先に口に出さなくてもいいという安堵感が勝ったのだろう。逆にどんな人生を送っていたんだろうかと黄璃は考える。

（……親が心配していない、ねぇ）

成績が悪くて怒られた、というのも考えにくい。カイには悪いが黄璃は『勉強の出来る人間』がどんな目をしているか知っている。カイはそんな目をしていない。というか成績だけでここまでボロボロになるまで暮らしていたとは考えにくかったのだ。

（……友達と喧嘩した）

しかしそれで家を飛び出すだろうか？　そんなの無理だ。不良と喧嘩して家に帰れないというなら飛び出すかもしれないが、しかし親が心配しないかといわれたら違う。逆に心配してしまうだろう。

（……分からないな）

このときの黄璃にはカイがここまで来たのは何故かということに全く想像することが出来なかった。何せそんな理由をもった子供と一度も会ったことがないから。

「ねえ、カイ」

初対面の人にさん付けをしないのは黄璃の神経が図太いからではない。黄璃はさん付けして呼ばないほうが心の距離を置かれないで済むと知っている。距離を取るのはその人と距離を縮めてもいいかわからないかである。しかし黄璃は誰と縮めても怖くなど無かった。だから呼び捨てで呼べるのだ。

「お風呂入る？」
「着替えが無い」
「あとでお母さんに買ってきてもらう。それならどう？」
「……今何時？」
「7時」

「じゃあ一時間後に入る」

分かった、と返事して黄璃はすぐにリビングから出て行った。母親に服の件を頼みにいくのだろう。実に行動が早い人間である。

黄璃が出て行くのを確認して、カイは思いっきりため息をついた。変に気を遣われすぎていることが分かり、黄璃に出来るだけ気を遣わせないように努力しているつもりなのｄ。実際は黄璃にそれすらもばればれだが。

「……俺何やっているんだろう」

黄璃と会ってからまだ1時間しか経っていない。しかしその間に雨をしのげる場所に移動させてくれたし料理もたらふくたべさせてもらった。さらには風呂と新しい服までくれるという。夢ではないかとカイは自分を何回も疑った。しかし現実に傷のある場所からは痛みが走っており食べすぎで気持ち悪いのも本当だ。

「……」

これだけ見ず知らずの人間に優しくしてくれる人だ。きっと多くの人を救ってきたということはカイにも分かった。しかし何故？他人を救っても何の得もないと分かっているだろうにという疑問があった。

貧しい国の子供達にお金を出すのは簡単だ。両親に言って金を出してもらい学校にいって先生に言えば金は――この時代はデータであるため現金は無い――わたる。それで少しは誰かが救える。

しかしそれは手間がかからない。もっといえば本当に救われたのかも分からない。それは他人を救ったのではなく「お金を出した」ということだけなのだ。

けれど黄璃がやっているのは違う。手間を書け本当に救われたの

かが分かり「他人を救う」という行為をしているのだ。それが理解できなかった。

（俺は、殺人者なのに……）

その言葉を思い出すとカイは思い切り泣いてしまいそうだった。いっそこの場から消えてしまいたいと思う。救われるのではなく野垂れ死にたいと、他人にこれ以上迷惑をかけたくないと強く願う。だが同時に生きたいと願う彼もいた。

（生きていて何が楽しいんだよ……！）

生きているのは辛い。自分は阻害され距離を置かれ罵られ人として扱われない。そんな人生を歩みたいと思えるわけが無い。思いたい人間がいるのなら本当のマゾヒズムだ。

今年は誓っていた。今度こそ優勝すると。しかし大会に出ることも出来ない。負けたことへの後悔も出来ない。今まで賭けていたものを棒に振られた、その絶望感が胸の内を支配している。それを確認して再度泣きそうになった。

「なんなんだよ俺……ッ！」

何なのか、その質問に答えてくれる人間はここにいない。答えてくれたものがいてもきっとその答えをカイは跳ね除けてしまうだろう。

「ほいっ、ってことで戻ってきたよカイー。……どうして泣いてるの？」

３０分が経ち、ドアを開けて服と下着を持ってきた黄璃は泣いて

いたカイを不思議そうに見つめていた。もしかして吐いてしまったのか？　と彼女は考えたがまわりにそんな痕跡はない。カイが立ち上がった様子も見られない。

「お～い、生きていますか？」

「……」

「返事が無い、ただの屍のようだ」

お決まりのセリフを吐きながらカイのソファの横へと座る。そのときも半ば苦笑しながら。

「大丈夫カイ。満腹で安心しちゃった？」

「……そんなところ」

「生きて言うなら最初から返事しなさいよ」

しかし黄璃は怒らなかった。もとより彼女は自分が助けた子に怒るようなことは滅多に無い。あくまで「愛のムチ」であり「怒り」などほとんど縁のない人間なのだ。

「満腹で安心しちゃうとか、今生きていることには安心しないの？」

「……生きていたいと思えない」

「でも死んでしまいたいとも思えない」

「……」

「図星かよ」

でもそんな見た目しているよ、と黄璃は快活に笑う。カイの胸中がどんなものでも黄璃は笑い続けている。

「……なんでそんなに笑っているんだ？」

「さあ？」

あくまで答えは無いと黄璃は告げる。けれどカイにとってはそれが不思議で仕方が無い。

「……面白いのか？」

「楽しいよ、他人と喋るってことが」

「……なんで？」

「その人のことが分かるから」

あ、でもそんなにカイのことは分かってないからねと告げる。そうじゃなきゃ俺は今すぐここから出て行くわとカイは突っ込む。そのあと2人で笑った。なんだこの漫才まがいなものはと。

「今君にとって人生は辛いでしょ？　でも誰かがいればなんとか乗り切れるんだよ」

「……漫画の主人公みたいな発言」

「でもこれって本当だよ私は思う。だって、何か楽になれるもん。自分を知っている誰かがそばにいれば」

「……そんなもんか？」

「そんなもんだよ」

ふぅ～ん、と納得していない様子のカイ。自分のこの数ヶ月間を目を瞑りながら思い出す。

――自分を遠ざける親、自分を傷つけようとする友達、自分を気味悪がる警察、そいつらがいてもカイが楽になることは一度も無かった。

「別に君を嫌っている人がいるからって君が楽になるわけじゃないよ」

まるで心を見透かしたかのような発言に、カイは思わず起き上がって黄璃を見た。その様子を見て黄璃は笑う。やっぱり当たったかと言っているみたいに。

「君といて楽になれる人間がいれば、君も楽になれるっていう話。そこは勘違いしちゃいけない。君といて苦しくなる人間が君のそばにいたら気味は苦しくなるんだよ」

「……人は他人に影響されるってこと？」

「そうでしょ。殴られたら嫌な気持ちになるでしょ？　助けられたら嬉しくなるでしょ？」

今の君みたいにね、と付け足す黄璃はやっぱり楽しそうだった。何が楽しいのかはカイに分からない。ただ見ていて幸せそうだなということは伝わってきた。

――俺もこいつみたいな人生を歩みたい。

ひそかにカイはそう思い始めていた。黄璃のような生き方が出来ればどれだけ幸せな人生を歩めるだろうと。

――でも俺にそんな資格があるか？

そんな思いがカイの思いにストッパーをかけてしまう。生きたいように生きることが出来ない。それがカイの咎だといわんばかりに。

「さ、とにかく風呂入ってきちゃいな」

そう促されてカイは風呂場へと連れて行かれた。ここで泊まるならとにかく臭いと汚れだけは取ってきてといわれる。

「え？　それはどういうい――」

バタンと浴場のドアが閉められる。それからすたすたとどこかへ行く足音。どうやら黄璃はどこかへ行ってしまったらしい。

「……まあ、とにかく入るか」

臭いがきついといわれるのが、少々心に響いたようだった。

影響（後書き）

感想待ってま～す

幽霊

身体のあちこちに出来ていた裂傷と格闘を繰り広げ風呂に入り終わったカイは、そこでどたどたという音を耳にする。

「……はぁ？」

いや違う、と彼は否定する。どたどたではない。ドドドドドドドドドドッ！　という音が孤児院を揺らしていることに気づく。まるで雪崩でも起きているかのような音だ。

音はそのあとも数秒続いた。地震でも起きてしまったかのようだ。

「なんだこれ！？」

気が終わった彼はすぐさま浴室から出て、音の正体を探ろうとどんな家なのかも知らずにただ歩く。

尋常ではない音ということは彼にもわかっていた。だが今までに彼はこんな音を一度も聞いた事がない。昔父の仕事場を見学させてもらったときですらそんなことはなかった。

カイの父親はＷＡＸＡで仕事をしている。今ではどうしているかは彼にもわかっていない。けれど星河ダイゴに次ぐ研究者――カイは星河ダイゴがどれだけすごいかは知らない――といわれたためにやめられるわけもなかった。息子が「些細な事件」を起こしたからで実力は変わるわけでもないのだから。

その父の仕事場はやはり何かを研究していて、専門は「電波」であった。そこでいろいろな実験もされていて、爆発音なんかも度々聞こえた。

だが今回の音はその爆発音を凌いでいるように思える。つまりこの孤児院では爆弾でも作っているということでは？

「……ありえないだろ」

いくら自分みたいな人間を救ってくれるわけの分からない人間だからといって、さすがに悪の秘密結社の一部ということはないはずだ。

そう思いながらあれ？　俺どっから来たっけ？　と分かれ道で止まってしまう。さっきの音がどこから響いていたのかも今ではもう分からない。

「……ってか、広くないか？」

孤児院、児童養護施設とか黄璃はいっていが無駄に広く金のかかっているように彼には思えた。彼の父の収入も良かったが、この孤児院ほど豪勢な家でもない。それに父親が特に豪華な暮らしを求める人間でもなかった。

よってカイからしてみれば黄璃は金持ちというイメージが出来上がった。

「……つまり俺を救ったのは金持ちの暇つぶし？」

悪いイメージだ、そんなことをする奴には見えなかっただろ？とその考えを否定する、

「とにかく、黄璃にこの音の正体とか聞きたいし……俺がこれからどうするかも伝えなきゃな」

風呂に入っている間、カイはこれからどうするかをずっと考えていた。もちろん生活のめどが立つまではここにいさせてもらえるのが一番嬉しいのだが、カイはその選択をしようとは思わなかった。

何故なら、何かの拍子で自分の過去を知ってしまったらということを考えると辛くなってくるのだ。

過去を知られること自体は可能性として低い。低いはずだ。けれど、彼は家出中なのである。捜索願でも出されて、挙句の果てには顔写真さえ出されたらそれこそ終わりだ。事件のことについて触れなければ、犯罪者として扱われずカイの写真はマスコミにも写る。

自分達の両親がそうするとは考えにくい。しかしその2人だけしかいないのではないかと思うとそれも違う。知り合いも数人はいる。その知り合いに自分がどうするかなんて喋っていない。もしカイが家出したことを知ったら？　探すのではないだろうか。

悪い想像だけはどんどん膨らんでいく。そんな可能性が低すぎることは彼は知っている。だからこそ可能性があると知った時点で彼は嫌なのだ。

出来ることなら、自分がここにいる間は、誰も自分を殺人者として見て欲しくないと。

「ここから出て、いくあては無いんだけどな」

だからといったってここにいたくない。いたいけどいたくない。その自己矛盾がカイを壊そうとしている。なので彼はすぐに答えを出した。彼自身を守るために。

道を曲がり、行き止まりにいくとカイはまた他の道を探した。だがリビングからどうやって浴室にいったかは未だに思い出せずにいた。それさえ分かれば彼もすぐに黄璃を見つけることが出来るのだが。

「……ん？」

カイの見つめる先には一つの部屋があった。そこからごそごそと音が鳴っている。さらにドアの隙間からは光も漏れている。明らか

に誰かがいる証拠だ。

「……黄璃？」

声を出しても返事は無い。ドアが開いてないから聞こえていないのかもしれない。けれどそのドアは見覚えも無い。ここがリビングではないことは明らかだ。

「……入ってみるか？」

誰かがいればそれはきっとこの孤児院の住人だ。その人に聞けば黄璃の場所やリビングなどすぐにたどり着くことが出来るだろう。

しかしこの住人全員がカイを知っているかと訊かれればそれはきっと違うと思う。何故ならカイはここに来てから黄璃以外の人間を見ていないからだ。それで全員知っていたら黄璃が教えていたと思うが、だが顔までは知っていないと思う。

なのでいきなり離しかけるのはカイの心境からして結構きつい。出来るなら自力でリビングを見つけて黄璃と話がしたいのだが――

「……よし、入ってみよう」

当たって砕けろだ、と呟きながら彼はドアノブを回す。そこまで怖いのか、と突っ込むたくなるかもしれないが、一応ほとんど知らない人と話すのだ。難しい人は難しいのだ。

入ってみると部屋は意外にも暗かった。ドアから光が漏れていたにもかかわらず、だ。

「……？」

おかしい、と思う彼の視線の先には『光の球』があった。白く輝

く光球、それがドアから漏れていたのだと気づく。
さらに誰もいないのに動く辞書みたいに分厚い本、ぺらぺらとめくられるそれは風で動いているようには見えなかった。
と、本が動くことをやめる。ぴたり、とその場が凍ったような錯覚をカイは覚える。何かがいる、彼はそう確信していた。
ふわりと空気が動いたような気がした。それはカイのほうへと何かが振り返ったようにも見える。ごくり、カイがつばを飲み込んだ。
頭ではその部屋から出ろ、といわれている。しかし心は何かをたしかめろとささやく。どっちを実行するべきか分からないカイはただ固まっていることしか出来ない。
そして、静寂が破られた。

『……誰ですか？』

その言葉を聞いた瞬間カイの耳は真っ赤にそまり顔もそれと同期し紅潮する。

「――ぎゃあああああああああああああああああああああああああああっ！！！！？？」

思いっきり叫び声を出しながらカイはその部屋から出た。数ヶ月前まで剣道をしていたおかげか声が良く出ている。
通路を反射する音を肌で感じながらカイは絶叫して走り回っている。あの部屋にいるのが何かを知ってしまったからだ。

（幽霊だ！　幽霊に違いない！　本当にいたのかよってかさっきの音も幽霊のせいなんじゃねえのかおい！？）

もはや思考回路がショートしている状態だった。誰だってあの状況を見たら幽霊と思うかもしれないがさすがに叫びすぎだ。

「な、なな何の声これ!?」

するとカイの走っている先にあるドアから黄璃が飛び出してきた。どうやらリビングにたどり着いたらしい。カイは運が良いようだ。

しかし頭がパンク状態の彼はとまることができずにいた。黄璃がいる、止まらなきゃということまでは分かっていたのだが幽霊のことを思うととまるにとまれなかった。

「そ、そこをどいってえええええええええええっ!!」

「え、カイ? なんでこっちに……って止まって止まって! 危ないから!!」

けれど悲しいかな、黄璃の願いはカイに届かず2人は激突、ぶっと押し倒される黄璃とわけの分からないまま倒れるカイ。

平均以上の身長を持つカイに倒れられては黄璃もすぐには起き上がることが出来なかった。その状況がどんなにあれな状況でも難しい。

というかそこで2人とも赤面するなんてことにはならなかった。

「おい黄璃! どういうことだこの家! 幽霊がいるのか!? そうなのか!? さっきの雪崩みたいな音は幽霊の仕業なのか!?」

「ちょ、苦しい重い……どいてよ」

「答えてくれよおおおおおおおおっ!」

すぐに倒れてからもぎゃあぎゃあとわめくカイ、それにすぐさまどくように指示する黄璃、お互いがどんな状況でいるのかなんてどうでもいいという状態だ。

「頼むから教えてくれって! じゃないと俺怖くていてっ」

「うるさい。とにかくすぐ立ち上がって」

黄璃に殴られた、しかも顔を。それを認識して彼はようやくわめくのをやめることが出来た。痛みと黄璃が殴るなんてことをするとも思っていなかったショックがあったせいだろう。

すぐにカイは立ち上がると黄璃が立ち上がることも手伝った。冷静になれれば一応彼も普通に接することが出来るようだった。

「……んで、幽霊がいるって？」

「ああ……！　いたんだよこの孤児院に！」

「んなわけないでしょ」

はあ、そんなことで私は痛い思いをしなければならなかったのかと呟く黄璃。どうやら背中が痛いらしい。倒れた衝撃からだろうか。

「いやだからいたんだって！　何か本をぱらぱらってめくったと思ったら『誰ですか？』って訊いてきてさ」

「へえ、実に紳士的な言葉遣いね。幻聴としては珍しいのかな？」

「幻聴じゃねえ。それにどちらかといえば女だと思うあの声は」

へぇ、と適当に頷く黄璃におまえ信じていないだろときれるカイ。身長は黄璃のが低いのにカイのほうが精神年齢が低いように見えるのは気のせいではないはずだ。

「とにかく、今はみんなの食事中。大きな声は出さないで」

「幽霊を後回し！？」

「分かった分かった。あとで幽霊を見たっていう部屋にはついてって上げるから。……ってかなんでさっきまでぼろぼろだったのにこんなに元気なの？」

「幽霊に会ったからだよ」

「……そうですかそうですか」

そういったあとに黄璃は先ほど出てきたドアにまた入っていく。ドアが開いていた瞬間、中から金属と何かがこすれるような音と幼い怒鳴り声がカイには聞こえた。

「……ん？」

黄璃の後に続く形でカイもそのドアをひらいた。もしかして幽霊が数人？　ゴーストバスターが必要なのか！？　と思いながらも彼は中を覗く。

「……なんだこりゃ」

だがそういってはいたものの彼は一応の納得はしていた。ここは孤児院だ、子供がいてもおかしくはない。それがたとえ１２人という大きな数でも、何も驚くことなんてないはずなのだ。

幽霊（後書き）

感想待ってま～す

行く宛て

「あら、あなたがハヤテ君？」

リビングにいる子供達の中に、１人だけ大人の女性が紛れていた。つややかな黒髪を肩より少し長めにし、その先をカールしている。ほっぺたは弾力がやわらかそうで、さっきから隣の幼稚園児くらいの男の子がぷにぷにと触っている。

その女性は、どこか黄璃に似ていた。

「……黄璃のお母さん、ですか？」

「ええ、黄璃希恵といいます。光からはあなたのことを聞いているわ」

にっこりと微笑みながら女性は夕食を口に運ぶ。その一動作一動作がなんだか様になっていて、お嬢様という雰囲気が出ている。カイには全く縁のない世界に感じられた。

おい、俺はもしかして擬似バミューダラビリンスに入ったのか……？

カイはリビングを見渡す。計１４人の人が、恐らく黄璃の作った料理を食べている。そのうち１２人が小さな少年少女がぎゃあぎゃあわあわあと言っている。どうやらこれがここに住んでいる孤児らしい。一見するとただの幼稚園生にか見えない。やせ細っているかと聞かれればそれは違うし、目が死んでいるかと訊かれればぎらぎらしていると答えるだろう。悲しみにあふれているわけでもなく食欲が溢れ出ていて、荒れているかといわれれば食べ物の奪い合いでたしかに荒れている。

その中で黄璃と、その母は行儀よく食事をする。フォークってあやって動かすんだ、スープってこうすれば皿が鳴らないんだ、ぼ

んやりと思いながらカイはそのリビングを見つめた。

「……あれ、ここどこですか……？」

「孤児院『夢の道（ドリームロード）』っていわなかった？」

さっきのこともあったからか、若干不機嫌な黄璃がいつもより低い声で答える。ぐるぐるとフォークを回して綺麗にパスタを巻き取ると、そのままぱくりと食べた。

「光、不機嫌そうに言うんじゃないの」

「……私を押し倒したのよ？」

「その言葉だと語弊がありすぎるだろうが。ぶつかっておまえが倒れただけだろ？」

「あんたも倒れたでしょ？」

犬猿の仲といわれても仕方がない喧嘩を開始する2人、それを交互に見ながら孤児院の女主人は笑ってこういった。

「へぇ、もう2人はこんなに仲良くなったんだ。いいことじゃない」

瞬間的に2人の口が止まる。2人の様子を見てさらに母は笑みの色を濃くした。

「それだけ言い合えるってことは、もう友達よ。カイ君もここで暮らせるね」

「――いや、俺は……」

暮らす気はない、続けてそういおうとした。だがそれをやめた。黄璃からの視線が気になったのだ。

「なんだ、何か俺についているのか？」
「いや、あんたがここに暮らす気はないっていうのかと思って」
図星だった。なんだこいつ俺の心を読めるのか？　さっと顔を青くさせながらカイは思う。
「別にそんなに驚かなくてもいいじゃない。ただ、あなたくらいの年齢だったら遠慮するかなって」
「えっ、ここで暮らす気ないの？」
黄璃とは違い驚く母。どうやらそこは似なかったらしい。母親のほうがどちらかといえばおっとりしているように見える。
「行く宛てはあるの？」
「いえ、ないんですが……」
さすがのカイでも初対面の大人に敬語を使わないわけにはいかない。とはいっても彼は今まで習っていたものが敬語をある程度使うのでそれなりに喋れたほうだ。
「じゃあ何でここから出て行くの？　食事がおいしくなかった？」
母の言葉に黄璃がぴくりと動く。
「いや、黄璃の夕食はおいしかったですよ。料理も多かったし」
「……あなたは量が多ければレトルトでもいいんじゃないの？」
「こっちは素直に誉めている」
「不服なことが他にあったの？」
「それもないです。飯も美味かったし、風呂場も綺麗でした。綺麗な服も貰ったのに、不服なんてことはありません」

「服だけにね」
「……え？」

ふふふ、と笑う希恵にカイは適当に愛想笑いを浮かべるのが精一杯だった。一体希恵が何をいっているのかが彼には理解できなかったのだ。

「お母さん、カイが理解できないでいるから、そんなこといわないで」
「いいじゃない、場を和ませているだけよ」

けれどこのリビングは和みに和んでいるために今更和ませる必要性は感じられない。ただ希恵がいいたかっただけだろう。

「……で、話を戻すけど行く宛てがないのに何でここから出て行くの？」
「迷惑になるかなって思って」
「ここはね、国に申請して援助も受けているの。それに私達、一応余裕のある暮らしをしているの。だからあなたを1人ここに住まわせても重荷になんてならないの」

それはカイにも分かっていた。こんな豪華なところですんでいる人間が金に余裕のない人間であるわけがない。そしてカイは脳の中に合った1つの記憶を掘り出していた。

ニホン国内有数の病院、黄璃病院――正式名称は穿城大学附属病院――の院長をやっているのが、たしか黄璃雷伽（ライカ）という男性だったはずだ。何度かテレビにも出ている人間であり、世界的権威のある医者だった。

つまり、おそらく光と希恵の身内に雷伽がいるのだ。それならこの家の豪華さにも納得がいく。その財産と国からの援助、どれだけ

の額になるのかカイには見当もつかないが、孤児院を設立するくらいの余裕があることは分かる。

「それはそうかもしれませんが……」

「ご両親の元に帰りたいの？　帰っても平気なの？」

「それは違いますっ」

反射的にカイは答えていた。

「帰りたいとは、思えません。帰って平気ではありません。僕の親族も僕を見放して、知り合いからも突っぱねられました」

「でも、何があったの？　お父さんは何の仕事を？」

「ＷＡＸＡの、研究員……」

「無理矢理勉強させられて、勉強につまづいたの？」

それは違った。カイの両親は無理矢理勉強させるほど勉強熱心ではなかった。犯罪にならないのならとくに何をやってもいい、だけどやるなら本気でやれといわれた。それで彼は剣道を小１から始めて今までがんばってきた。その裏、勉強も少しは復習をしていたために成績も良かった。だからそれで見限ったわけではない。

「……大きな過ちをしたんです」

カイはゆっくりという。

「何をしたの？」

「言いたくありません。でも、取り返しのつかないくらい酷いことをしました」

幼児達の声が酷く遠く感じられた。まるでここだけがガラス張り

のドアで阻まれているかのように。

「……それで？」

「それで、自分から家を出ました」

「だから私達とは一緒に暮らせないっていいたいの？」

はい、震えそうになる声を押さえでカイは答える。あのときの光景がちりちりと脳の後ろでフラッシュバックし、そのあとの数日がよみがえり、声が再生されて、辛かったのだ。

「でも、そんな酷いことをしていても警察にいないってことは、あなたは無罪なんじゃないの？」

「……特殊なケースだっただけです」

「それでも無罪には変わらない」

口元に笑みを浮かべる希恵は、カイには小悪魔のように映った

「だったら、あなたは何も気にかけることはないわ」

何も知らないのに、どんな罪を背負っているか希恵は分からないくせに、そう断言した。

「……警察に捕まってないからって、罪っていうのはちゃんとあるんですよ。万引きだって誰にも見られていなきゃつかまらないでしょ？　あなたはそんなことをいっているんですよ？」

「今の時代万引きなんて１００％つかまるけどね」

「数年前までは違った。……とにかく僕の罪はそう次元の話なんです」

「……ふ～ん」

ゆっくりと紅茶をすする希恵。その動作はお姫様めいていて、この喧騒な雰囲気が似合わない。けれどどこかここにいる人間を全て惹きつけてしまいそうな雰囲気をまとっているのもまた事実だ。

「でも、あなたは本気でそう思っているの？」

「……どういうことですか？」

「あなたの目、俺は間違ってないっていうふうに見えるよ」

「……ッ」

希恵の言葉に思わずカイは瞠目してしまった。すぐさま否定してやりたかった、何を嘘を言っているんだと。でも出来なかった。それが、本当に思えてきてしまって。

「間違っていないっていうか、それしか方法がなかったっていっている。恨むなら神様を恨めっていう開き直りも見えるな～」

「……そんなわけないでしょ？」

ようやく否定の言葉をいえたがその声は弱弱しく、説得力がかけらもなかった。

「私は別にあなたの罪を今から調べるつもりはないよ。別にあなたがどんな罪を背負っていようが私は許容できると思う。それでもここに住もうと思わない？」

「……なんで、あんたと光は親切に出来るんですか？」

「……昔、１人の女の子が死んじゃったの。私はこの子達と同じようにここでその子を暮らさせていたんだけど、いつしか家出をしちゃったの」

ぽつりぽつりと、希恵は語りだしていく。

「その子は家庭内暴力を父親から受けていてね、ここにきたときは全身が痣だらけだった。何で家出したのか知った私は、すぐにここに匿った。この子が自立できるまで」

心なしか希恵の持つフォークが震えて見えた。さらに黄璃もそのことを語りだされてから顔を下に向け、うつむいている。

「だけど、どうやってかその父親に数年後にばれちゃってね。一週間近くその子を取り戻すために何度も暴言を吐かれたわ。警察にはいえないし――逮捕されるのは私達だからね。怪我も治っていたから家庭内暴力があったなんて、それこそ裁判起こさなきゃいけないし。なにより先にその子が家に戻っちゃった」

涙がはらりと頬を伝い、テーブルに落ちる。

「数日後に、その子は死んでしまったわ。父親が殴り殺しちゃったみたい。いや、もっと酷かったらしいわ。子供に話しちゃいけないくらいに」

希恵の口元が三日月を象る。けれどそれは笑顔と呼べないと思う。無理矢理につくろっているのだろうか。

「そこで決めたの、ここに来た親元へ帰れない子供達は、ここで住ませて上げようって。何が何でも。大学に行きたいなら学費も全部払うから……」

涙をとめようとしない希恵は、そこでカイにもう一度お願いした。

「だから、あなたもここに住みなさい。とにかく今日は止まって、明日に答えを聞かせて」

嫌だ、そう答えることは、カイには無理だった。

行く宛て（後書き）

感想待ってます

不安定

カイが眼を醒ましたとき、彼の身体は見知らぬ小部屋に寝ていた。

「……ああ、そうか」

ここは孤児院の一室、昨日部屋がないことに気づいた希恵と光の手伝いによって物置部屋を使わせてもらうことになったのだ。埃臭いようでもあるが、１００日以上を外で雑巾みたいに暮らしてきたカイにとっては特に何も感じない。逆に清潔感があると感じられるくらいだ。

「結構眠ったな……今何時だろ」

肩や膝という関節が気だるい。寝すぎてしまったようだ。そういえば布団で眠ったのって久しぶりだもんな、と思いながら物置部屋から出る。

そう、彼は昨日仕方なくここで寝た。ほぼ強引とも取れる形で寝た彼は当初あまりいい顔をしなかったのだが、寝たらごらんの有様だ。心の奥底では安眠を望んでいたのだろう。

寝た時刻が覚えている範囲で１２時くらい。７時から１２時まで何をやっていたかというと、孤児院がどんな構造をしているかレクチャーを受けたのだ。やはりというか建物は大きく、２０畳あるリビングが１つ、光、希恵、雷伽、孤児達の寝室で１５、物置部屋６畳が３つ、さらにトイレが１階一こずつで計３個。建物の裏にはちょっとした庭もあり幼児の筋力も考えれば野球も行えるくらいだ。

なのでその配置を全て覚えた――光に無理矢理覚えさせられた――カイは３階から１階を一気に駆け下りていく。昨日の雪崩のような音は孤児たちによって起こされたが、当然カイ１人では起きない。

寝ぼけた頭を振り払うようになんとかリビングまでたどり着く。途中で数回転びそうになる多なんどもこらえた。完全に身体が「安心」してしまっていた。それを自覚してカイは歯噛みする。何をやっているんだと怒ってやりたいくらいの気持ちだ。

「あ、おはようカイ君」

希恵の優しい笑顔で出迎えられる。その笑顔に少し戸惑いそうになるカイだが、「……おはようございます」とぎこちなく言えた。カイにとって親というのはトラウマの一種だ。その笑顔も、自分の母のと似ていて、それが余計彼の胸をざわつかせた。

「はいはい、寝坊した人は早く席に座る」

なので自分の家にいなかった種類の人間には普通に接することが出来る。

「分かったよ。そう焦らすなって」

うざったいとばかりにそういう。カイの寝坊によって光は母と違っていて不機嫌そうだ。おそらくわざわざ朝から作った料理を冷ませて食べるのが気に食わないのかもしれない。不機嫌になっても仕方がないかもしれないが、それでもなんかカイの癪に触った。

今何時かは分からないカイだが、窓から差し込んでくる暖かな陽光の角度から午前7時くらいだろうと推測できた。そんななか、孤児――幼児たちは時間通りきっちりと席に座って食事のときを待っている。

不機嫌な光の隣に座ると、幼児たちの視線がカイに突き刺さる。おまえのせいでこんなにも待ったんだぞ！　そんなセリフが聞こえてきそうな雰囲気だ。結局自分が悪いのかと心の中で嘆息。

「ではみんな揃ったので、手を合わせましょう」

光の号令で席にカイ以外の全員が合掌する。軍隊めいたその動きにやや気圧されながらもカイも慌てて合掌する。その光景を横目でちらりと光は見ながら言葉を発した。

「いただきますっ」

それが開戦の合図となった。幼児たちはいっせいにテーブルに並べられた色鮮やかな食品を自分のさらに盛り付ける。ここのルールではセルフサービスらしい。から揚げやサラダなどがものの数秒で消えた。

「……うわぁ」

早食い選手権か何かかよ、と思わざるを得ない。実際幼児たちは盛ることだけが早いだけで食べるのはそこまでなのだが、それでもその光景を形容するにはその言葉しかなかった。

「あなたも食べたほうがいいわよ」

横で光も人気のない食品を「これも食べて欲しいのにな……」とぼやきながらさらに移していく。その反対側では希恵がまだ箸を使うのもままならない子供に食べ物を取ってあげている。

「……そうだな」

自分の目の前にある箸と皿を使ってから揚げを1つとサラダを少々盛り付ける。ご飯だけは最初からよそって合ったのでこれだけで

彼にとっては充分だった。昨日食べ過ぎてあまり食欲がないのだ。あまり食べてなかったのにいきなり数人分を腹に入れてしまっては、胃がおかしくなるのは当然だ。それを今更気づきながらゆっくりとサラダを口に運んでいく。

「ずいぶん長い時間遅刻したわね」

カイを見ることもなく光はいった。まだ何かいうつもりらしい。

「……ちなみに今の時間は？」

「７時１０分ってところかな。朝食の集合は７時」

「１０分の遅刻か。そりゃ悪いことしちまったな」

「……何をいっているの？『２４時間１０分』の遅刻よ？」

「……は？」

思わず光のほうを見るカイ。光はというと、やはり不機嫌そうな顔で続ける。

「あなたは昨日、まるまる布団に突っ伏していたってわけ。おかげで昨日の食事は毎回３０分遅れ。あなたを起こすためにそのくらいの時間を使ったのよ」

「嘘だろ、そんなに寝ていたのかよ……。そりゃ身体も気だるいわけだ」

「顔を叩いても駄目だったし、余程気持ちよく寝ていたらしいわね」

光はまだ食事は開始していない。食べながら会話するというのは行儀が悪いからしないらしい。その横で食べながら食事するのも気が引けたのでカイも箸を動かさない。

「久しぶりの睡眠だったからな。結構眠れた……久しぶりだからな」

「家で眠るのが？」

その問いにカイはこくりと頷く。彼にとってみれば数ヶ月間ホームレス生活だったのだ。安眠なんか出来るわけがない。

「……一体どんな生活を訊きたいわ。病院にまで連れて行ったんだから」

「病院？　なんで？」

「叩いても起きない人間がいたら死んだか意識不明か何かだったと思うに決まっているでしょ？　だから私のお父さんの病院に連れていったわけ」

救急車にのっていても起きなかったんだから凄いわ、呆れ半分に光は言う。

「……わざわざ一緒に来てくれたのか？」

その質問にびきりと光の身体が固まったように見えた。何か悪いことを質問したか、と振り返るが特に問題はなかったように思える。けれど光はすぐに硬直を解いて口を動かす。気にしない気にしない、と言い聞かせるように。

「……ええ、そうよ。お母さんも手が空いていなかったし。私が行くしかなかった」

「通りすがりの人間にそこまでするなんて、おまえってお人よしだな」

カイは心から、謝罪とも呆れとも取れない調子でそういった。道端で怪我をしていた雀を獣医に診せるとはまた違う話なのだ。それを簡単に行ってしまう光。同年代の人間だとは思えなかった。

「よく言われるけど、じゃなきゃここで暮らしていけないわ」
「……そんなもんか」
「そんなもんよ」

さ、早く食べましょ、と光はようやく盛り付けた食べ物を上品に口にする。カイもそれに従いようやく飯を腹へと入れていく。光が作った料理は、カイの腹にじわりと染みていった。その感覚が何なのか、カイは思い出せないけれど、何か嬉しくてそのまま食べ続けた。

「……で、今度は仕事か」

1日眠っていた罰だ、そう光にいわれてカイは洗濯物を干していた。15人分もかよっ、と戦慄したカイだが渡されたのはその5分の1にもみたないものだった。今時洗濯機など乾燥機も装備されていて、しかも性能もいいので使う外で干す必要などない。けれどあまりの人数の為に仕方なく少しだけ乾かす、というのがここのやり方だ。

固まってしまった筋肉をほぐすように竿に洗濯物を吊るす。今日は絶好の洗濯日和で、雲ひとつない。2日前に雨が降っていたとは思えないくらいに晴天。

（こういう日は気持ちいいんだよな。どっかで遊ぶのが最高に楽しい。カケルとかジュンタとか――）

そのあとの思考をカイは止めた。まただ。またあの事件の前で思考が止まっている。

（俺は記憶障害になったのか……？）

ある数学学者が事故で、事故が起こる前の記憶しかもてなくなってしまったという映画があった。今のカイはそれに似ている。記憶は事件のあとのものもあるが、思考が違う。

（ましな環境になった途端これ。つまり俺は、またあのときと同じように暮らせると思っている？）

ここで、あの温もりの中で暮らして生きたい。そう思っている彼がいた。けれどそれは叶ってはいけないのではないか？　またあの時と同じようなことがおきてしまうのではないか？　そのとき、自分はどういう選択をするのか？

考えただけでも恐ろしかった。考えてはいけなかった。あんな人たちを、殺させたくはない。けれどあんな人たちの前で、誰かを殺したくない。殺せばまた同じように出て行かなければいけなくなる。

蔑む眼が、あんなに温かく接してくれた人の眼が悪魔を見るような視線に変わる。そう考えただけで薄ら寒い。背筋が凍る。足がすくむ。

フラッシュバックする親や学校の児童、隣人、警察官。誰もが思ったに違いない、この子はおかしいと。人を殺したのに、間違っていないと思っているカイが。

（嫌だ嫌だ、そんなの嫌だっ。怖すぎる、それなら最初からここからいなくなったほうがマシだっ！）

いつしか洗濯物を吊るす腕が止まっていた。顔は血が通っていないのではないかと思うくらいに冷たい。全身が石になったみたいに動かない。

（俺は人を殺して、後悔できるのか？　人を救った喜びと同時に、自分の行ったことがどれだけおそろしいかがわかるのか？）

考えるたびにあのとき木刀を振るった感触がよみがえる。ごっと鳴る頭蓋、あっと声が漏れる強盗、両親が息を呑む音、血が軽く付着する木刀。

「――あああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁああああああああっ！」

気づけばカイは叫んでいた。考えるたびに、ここにいるたびに、人と接するたびに思い出すあのときのこと。気持ち悪い、それでも自分は間違っていないという結論が彼を苦しめる。それでも周りは自分を蔑むことが彼を痛みつけた。

もうどうすればいいか彼には分からなかった。１人で思考に耽るとこれだ。あのときのことを思い出す余裕が出来たらまた壊れる。人と接していたことを思い出さないくらいに衰弱すれば、ホームレス生活を勧めていたらこんなことにはならかったはずなのに――

そのとき、ぽかっとカイの後頭部に何かがぶつかった。身体の硬直が解ける、それと同時に喉から音も止まってしまった。

何だ？　と思いながらカイは振り返る。考えていた思考が止まったのは嬉しいが、それでも疑問に思う。

「誰だっ貴様」

そういいかけてくるのは小さな幼児。その幼児は１１人の幼児を引き連れてカイを睨みつけている。右手にテニスボールが握られているのを見ると、カイの頭にぶつけたのは幼児たちらしい。

「何で光おねえちゃんを苦しめるんだっ。……許さない、みんな攻撃だっ！」

リーダーと思わしきその少年が号令をかけると、幼児達は各々の武器でカイへと飛び掛る。恐ろしいくらいなまでに、その動きは統率が取れていて、カイの逃げ場はない――

不安定（後書き）

感想待ってます！

提案

「……で、どうしてこうなったの？」

あきれ果てた表情で光は１２人の幼児と１人の小学六年生を見ている。何だかものすごく疲労感を味わっているようだ。

彼女の前ではぼろぼろになりはてた子供が１３人、いずれもどこかしら裂傷があり泥だらけの様態だ。どこの敵地にもぐりこんだんだ、と

突っ込まれるくらいには酷い汚れようである。裏庭から騒がしい声が聞こえて光が発見したときにはこの有様だった。洗濯を任せているカ

イに限っては孤軍奮闘していた。

「一応言い訳は聞いておくわ。まずカイ、年長者のあなたから聞いておくわ」

「こいつらが襲ってきました」

青あざを見せながら新入りは答える。悪びれた風もないところを見ると反省なんかしていない。「え？　なんで正座で裏庭に座らせてい

るんですか？」そう思っているに違いない。

答えに一瞬目頭を押さえかけた光だがぐっとこらえる。ここで泣きそうになってしまっては駄目だ。こんなことで折れてしまっては私は弱

いってことなんだ。

「いやいや、襲うような子じゃないよ。たしかにプラスチックで出来た日本刀やら野球ボール、小さなバトミントンラケットが散らばっていてるけどさ」

「俺も襲う奴じゃねえよ」

「……信じられない」

悲しいかな、新入りであるカイは一番信用が薄いのは当然だ。だがその不利をなんとか覆そうと頑張れるのがカイという少年だ。

「嘘じゃねえよ。『光お姉ちゃんをいじめるな！』っていって突っ込んできたぞ。好かれているなおまえ」

「……今までそんなことなかったけど」

しかし光は首をかしげたままだ。どうやらそんなことを幼児がすると微塵も思っていないらしい。正座で座っている幼児を順々と見やる

ものの、その眼はいっぺんの疑おうという気がないように見えた。

裏庭で正座させるのはどうなの？　と思うかもしれないが泥だらけのまま家のなかに入らせることが出来ないために仕方なくここで光は

詰問していた。さんさんと降りかかる太陽の下でずっといたくはないのだが保育係として責務を全うするために我慢している。実に律儀な

子である。

「こいつが嘘ついているんだよ。僕達が人を襲うわけないもんっ」

そう言い張るのは先ほどカイに宣戦布告したリーダー格の少年だ。さっきまでは威勢よく喧嘩をしていたもののカイが逃げ回り体力戦に持ち込んだためにこんな結果になってしまった。それが気に食わないのか目を赤く腫らしている。泣くなよ少年。

「そうだよ光お姉ちゃん、この人が私達を襲ってきたんだわ」
「ユーコのいうとおりだよ、アンザスも見てただろ？」
「ミテ、タヨ。アイツ、ボクタチ、襲ッテキタ……」

立て続けに幼児たちの逆襲が始まる。ニホン人たちだけではないようで、肌が比較的黒いものや白いものも見受けられる。世界がグローバル化が進み、孤児たちにも人種が出来たというわけか。

「マユリも見てたよ。めっちゃ顔を赤くしてリクを襲ってたの」

1人の少女がリーダーを指差して言う。それを横目で見ながらカイは嘆息するしかなかった。実際彼は洗濯物を干していただけで、無実であるしかないといえる状況だ。別に殴ったり蹴ったりしたわけではなく、ただ防御に徹していただけなのだ。

幼児に本気を出さなかった、というよりは出せなかったというほうが近い。フラッシュバックした記憶が怖くて、また起きてしまいそうで

。もし仮に『夢の道（ドリームロード）』に木刀があると思うと、ぞっとしない話だった。

だからカイはここに光が駆けつけてくれたのが嬉しかった。こいつなら何とか止めてくれるのではないかという、安心感をもたらしてくれた。何故なのかは分からないが。

「……じゃあカイが分からないわね」

「おいっ！」

思わず保育係を見るカイだが、当の本人は数回頷いている。どうやら幼児たちが正しいと思ったらしい。

「幼児に手を出すとは、酷い奴を拾ってしまったわ……ごめんね、みんな」

「それはないだろ普通！　なんで俺がこいつらを襲わなきゃいけないん――」

「いいよ別に。光お姉ちゃんは悪くないよ、悪いのはこいつのせいだよっ」

「そうだよ、別に光お姉ちゃんのせいじゃない！」

「ボクモ、ソウ思ウ……」

幼児たちは必死に光が悪くない、悪いのはこの銀髪の男だっとわめき散らす。もはやカイは不利ではなく敗北ムードになってしまった。

「じゃあ、お姉ちゃんがこの悪い人をどっかに捨ててくるね☆」

カイには光の語尾に見えない星が見えた気がした。きっと気のせいだよな、と思っていたが光に無理矢理右腕を掴まれる。

「……はぁ？」

つかまれた右腕の意味がカイには分からなかった。手のひらではなく手首を掴まれるというのは初めてだ。一体これから何をするのかと思えば

「じゃあ行くよ」

無理矢理カイを引っ張り始めた。

「ちょいちょいちょい！　何やっているんだてめぇ、いてえし」

手首を捕まれていてふりほどこうにもふりほどけない。踏ん張ろうとしても踏ん張る前に光がカイを連れて行ってしまう。

「はいはい犯罪者は黙って」

「誰が犯罪者――いや待てそんなことはいい。おまえあいつらのこと信じるのか！？」

だがその問いには答えず無言で光は連れて行く。抵抗が無理だと悟ったカイは、まさか取って食われるわけでもないと思いされるがままに歩いていった。

「で、これからどうするの？」

カイが連れて行かれたのは案の定リビングであった。だがまだ昼飯時ではないためにカイと光だけが座っている。十人分もあるテーブルで2人だけが座るのはおかしな風景だった。

「……これからって？」

「あなた、このままここにいるのかってこと。昨日返事に困っていたでしょう？」

「……あいつらのこと信じていないのか？」

その問いに光は嘆息しながらも首を横に振った。

「何かあの子達やけに今日はおかしかった。あなたみたいな子が来るのも珍しいからああなったのかもね」

「俺は悪くないからな」

「知ってる。あなたが本当に喧嘩したなら1人くらい痣があってもおかしくなかった。でも、どう見ても転んだときの傷と泥しかなかった」

思わずカイはうなってしまった。光がすぐに結論を出さなかったのは結局真実を見極めるためで、幼児達の話を聞いているわけではなかったのだ。

「というか、あなたが喧嘩をする人間だとは思えないんだ、私」

「……？　何でだ」

「あなた、争うことを毛嫌いしている節があるから」

内臓を握られたような感覚をカイは味わった。思わず顔が引き攣り、眼も見開かれる。何故争いを毛嫌いしているのかなんて、彼には1つしか心当たりがない。

「争いってさ、多くの場合人と人との距離を縮めようとしたときに起こるものなの。お互いが距離を縮めようとして、そこで距離の取り方がまだお互い分からないからいろいろトラブルが起こるわけ。でも、あなたって絶対争いが起こる距離まで入ってこない」

「……よそよそしいってことか？」

「私とあなたは昨日会ったばっかりだけどこんなに話しているよね？　……それはあなたが距離間を上手く計れているから。ゆっくりゆっくり縮めようとするのが普通だけど、あなたはどこまで初対面の人間と接していいか分かっている。だから私も話やすかった」

そんなことまで考えているのか。感嘆せざるを得なかった。光は人をよく見ている。もしかしたら自分の心の奥底まで見られているのでは

ないかと思い、カイは怖くなった。

「でもあなたはそれ以上近寄ろうとしない。私と似ている人と以前会っているからこんなに話せるのかな、って思ったけどそれも違う。あなたは人の性格に応じてどんな喋り方をして、どんな行動をして、

どんな風にすごせばいいかわかっている。機械みたいな人間っていえばいいのかな。状況に応じてただ行動する。そんな人間なら、距離を取ろうとは思わないかもしれない」

「酷いたとえだな」

「否定は？」

「……しないでおく」

手札を見られながらばば抜きをされている感覚だった。全く勝てる気がしない。勝負事ではないが、それでも勝てないの４文字が頭を支配する。

「問題はなんであなたがそう振舞うかってこと。ただの人間にはそうできない」

「……じゃあどうすれば出来るんだ？」

「人と接することを恐れている人間は、もしかしたら人に合わせる生き方をするかもね」

手に汗がにじむ。心臓の鼓動が早まるのを感じる。窓から差し込んでくる陽光が酷く暗く感じられた。

「拒絶するのではなく、接しながらなお踏み込まないように生きる。人間だから接しないってわけにはいかないからね。そういう意味では一番いい生き方かも」

「誉めてくれてありがと」

「誉めてない」

きっぱりと告げられる。

「……ハヤテ」
「……ん？」
「あなたのことでしょ」
「……ああ、どうしたんだよ。呼び方変えてびっくりした」
「実体がないって、どんな気持ち？」
「……は？」

光の問いの意味が分からなかった。実体がないということと、ハヤテと予備直したことが繋がらなかった。

「風ってさ、形がないよね。見えないけど、形もない。物にぶつかるときはその表面をなぞって通り過ぎちゃう」
「……つまり？」
「あなたはそんな感じみたいね」

物の表面だけをなぞり、決してぶつかることはない。それが風、硬くもなければ柔らかくもない。見えなければ触ることも出来ない。それが風。カイというなの人間を一番よく表わしているかもしれない。

「実体を持たないから傷つくことも無い。だけどカイ自身は傷つけることは出来る。カマイタチみたいにね」
「……無敵じゃねえか、それじゃ」
「無敵ではない。風は、簡単に操られちゃうんだよ。それこそ、うちわの一本でもあれば。だからあなたは誰も傷つけようともしないし、理解使用ともしない。表面だけなぞることに徹して、中を知ろうとしない。それだけじゃ、あなたはいつか道を踏み外すよ？」

「……」

その言葉にカイは何もいう事が出来なかった。いや、言い返そうとはした。道ならとうに踏み外し、ここにいるのだと。

だがそんなことをいえるほど、カイは無神経ではない。世話になった人間にそんなことを言えないのは、かすかに残った良心からか。

「そんなんだったら、ここにいてゆっくりと暮らして自立できるまでいたほうがいいと思うよ。あの子達にからまれるかもしれないけどさ」

「……悪くは無いけどさ」

踏み外した道をもう一度戻ろうとする、それが悪いことだとカイは思っていない。それよりも戻りたいくらいだ。だが、その過去のせい

でまた誰かが傷つくことになることだけは許せない。

せめぎあう2つの意見、待っているのはどちらもいい未来とはいえない。結局カイはこの先いい人生を望むことは出来ない。だから

――

カイは答えを決めた。

「――俺は、今日でここを出るよ」

ここを出ることに、自分だけで生きていくことを、彼は決めた。

提案（後書き）

感想待ってます！

旅

「そんじゃあ、お世話になりました」

ぺこりと腰を曲げ礼をするカイ、一応の礼儀作法はわきまえているんだと光はぼんやり思った。午後4時、街が夕陽に照らされる時刻には出るとカイは言った。宣言どおりに彼は今孤児院の玄関で見送りをする光と希恵に感謝の思いを告げている。

「……なんか、成り行きで助けてもらいましたが、本当にありがとうございました。俺みたいな雑巾みたいで臭い奴と一緒にいるのはとっても辛かったと思いましたが、顔色1つ変えずに接してくれたのは本当に嬉しかったです」

涙もないのにそんなセリフをいわれても本気でそう思っているのかは疑問でしかなかったが、おそらく照れているのだろう。素直になれないのかもしれない。

それとも、嬉しさを表情に出すのが出来なくなってしまったのか。

「いえいえ、あなたと過ごした時間は私にとっても有意義だったわ」

表裏の無い笑顔でそういうのは希恵だ。いつも笑顔を絶やさない彼女は、別れのときでも笑みを浮かべていた。たった1日泊めただけの人間がいなくなっても悲しむわけがないだろうなとカイは思う。

「また来たくなったら来なさい。いつでも待っているから」

「……すいません」

「えっ？」

「いやいやなんでもないです」

思わずカイは謝ってしまった。

（ったく、何で俺はこんないい人のことを悪く思うんだ！）

たった1日接しただけでも分かる。希恵という人間が、それこそ聖母のような人間なんだと。手際の悪いカイに迷惑そうな表情1つ見せずに教えてくれた。なのにカイは今悪い印象を植え付けようとした。

（別れたくないと思わないようにするのは分かるけど、それは駄目だよな……）

こんないい場所に住みたくないわけがない。いっそ自立できるまではここで暮らしたい。最後までカイは迷い、そしてここを出ることに決めたのだ。なら後悔を少しでも小さくしようとするのは無意識のうちにしてしまうことはあるかもしれない。

そんな自分に悪い印象を植え付けながら、カイは孤児院を1度見る。紅くそまったそれはいつ見ても綺麗で孤児院ではなく協会か何かだと錯覚してしまうだろう。いつか、もし自分が自立できたらまた来よう。そして今日の1日の恩返しをしよう、そう心に誓った。

「……で、私には何も無いんだ」

光は少しぶすっとしたように言う。希恵にしか礼を言わなかったのが気に食わなかったらしい。

「おまえにも悪いことをしたな。……拾ってくれたのに」

「……それについては別にいいわよ。ただ、これから先気をつけて」

礼を聞くやいなやすぐに心配するのだから光も少し掴みどころの無い人間だ。結局彼女はお礼というものに対してあまり価値を感じていないのだろう。

「飯、上手かったな。多分俺が食ってきた中では1番だった」
「もう一度食べたかったらまたここに来て。無理しないで」
「……うん」

もちろんカイは数年後のうちにここを再度訪問するつもりではいた。だが、それが本当に出来るのかという不安もある。この孤児院から出るということは、結局安全地帯から地雷がたくさん埋め込まれた危険地帯に戻るようなものだ。
死ぬとは思いたくない。だがどこかで野垂れ死ぬ可能性は否定できない。人間の命など、儚いものなのだから。

「どうせなら、お弁当作ってあげればよかったじゃない」

今更とばかりに希恵が思いついたようだ。しかし光はそれを数時間前にはとっくに考えていた。作らなかったのは、カイがいらないと言ったからだ。そこまでは世話になれないと。
あくまで光は親のように子供のためを思って何かを言うようなことはしない。いわば家庭教師のようなものだ。その子がどんなことを目指しているのかを前提にし、目標にあっただけのことは手伝う。カイの目標が自立であり、誰の手を借りずに生きることならば、弁当は作らない。

「別にいいんですよ。生きていけますって」
「そう？　でもまたずぶ濡れにならない？」
「今度は濡れない様にします」

カイはここで数十分も引き止めて欲しくなかった。引き止められる時間が長いほど、ここにいたいという欲求が深まってしまうから。まだここを離れたくないといっそう強く思ってしまうから。

だけど、彼は背を向けてすぐにここから逃げられるほど強くなかった。

「傘くらい上げようか？」

「いらない。荷物があると歩くから疲れるんだ。雨宿りできる場所を探すよ」

半分本当、半分嘘を平然と言ってのける。そんな理屈光には通じないと分かっているが、カイがどんなことを求めているのかを光は理解したためにそれ以上言わなかった。

「何か持たせたいんだけど、カイ君がいらないというなら仕方ないわね。服は新調したからすぐには汚れないでしょうし」

「本当にそれだけで充分です。代金は――」

「ここに戻ってきたときに払ってくれればそれでいいわ」

本当に希恵がカイは戻ってくると信じてくれていているようだ。もしかしたら辛い現実に耐えられないために数日でここに戻ってくると予想しているのかもしれない。けれどカイは数日で戻ってこようとはしない。何が何でも、自分がいるとどんな悪影響を及ぼすかを言い聞かせて来ないつもりでいた。

「来たくないなら、それでいいけどさ」

挑戦的な視線を光はカイに向ける。どうやらカイが孤児院を気に入っていることを見抜いているようだ。

「来たくないわけないだろ？　衣食住確保できるのに」
「――それだけじゃないでしょ？」

今度は見透かすような視線、何かを確信しているかのような目つき。そこでカイは本当に光は知っているのだと気づいた。自分が孤児院を気に入っているのは、人の温かさがあるからだと。もう二度と手に入れられないと思っていたそれを目の前に、自分が安心していることを。

もちろん光は殺人事件に関しては知らないだろう。あくまでも人の温かさが恋しかったというだけを見抜いた。ここで殺人事件のことまで察していたら、光は来ていいよなどとは言わない。言って、くれない。

「……そうだな」
「私のご飯がおいしいからでしょ？」

どこからどこまで本気か分からない言動にカイは思わず苦笑する。見抜いていてここまでの冗談（事実ではあるが）を言ってのけるなんてそういないはずだ。本とにいい奴だと思ってしまった。

「それでは、そろそろ僕は行きたいと思います」
「気をつけてね、カイ君」
「また会おう、カイ」

2人の言葉に、軽く頷くと今度こそカイは孤児院から背を向けた。ようやく背を向けることが出来た。

（これで、俺はまた独りになる）

それがどんなに苦しいのかを彼は知っている。これから待っているのはとても険しい茨の道で、後戻りは出来ないのだと。

孤児院から大通りまでの直線上の道を早歩きで渡りきると、カイはすぐに大通りに沿ってニホンを南下しようとした。別に南に何があるというわけではないが、1度南のほうに行って見たいと夢見ていたことがあったのを思い出したからだ。

（一人旅、みたいになるのかな）

金も無い、あるのは新調されたばかりの服のみ。それで旅と言えるのかは甚だ疑問だが、カイはそう捉えることにした。生き延びることだけを考えるのではなく、生きるうちに楽しみなどを思うようにしようと。

カイはこの一泊二日の生活で、人間らしさを少し取り戻してきた。人と接することが少なくなってきて、最初は戸惑うことしか出来なかった彼だが、今ではましに会話も出来るようになった。

過去にあった殺人の罪は消えない、そして傷ついた心も治るのに相当時間を要することだろう。過去を知られたら、きっと誰もが自分を遠のける。

いつか理解してもらう人間を探そうと、カイは思っていた。あの殺人が決して全てカイが悪くは無いのだと。

光や希恵に理解されたかった部分もある。だが怖かった。自分があからさまに怖がられるのが。

なので彼はいつか自分の過去が間違いではないことを証明してくれる人間を見つけようとする。そのときには、過去を知られても誰もがカイを遠ざけるということはしないと思うから。……そう思いたい。

「分からないよなぁ……」

一番星が煌き始めた空へとつぶやく。大きな声で通りすがりの人間が一瞬カイを見るが気にしない。

「駄目だったら、それまでさ」

隠匿して、過去を全て抹消して、一からやり直す。自分を壊して一から作り直す。そんなことが出来ればカイは今すぐにも実行している。それが出来ないなら、本当に独りで生きて独りで死ぬしかない。

赤信号によって足を止められるが、急いでいるわけでもないので特に憤慨することも無い。こんな待ち時間など、彼が旅する期間と比べればないにも等しいことなのだ。

信号を待っているのは、どうやらカイ一人だったようだ。夕方ということもあり、ここらへんにはスーパーもあるから人はある程度いるはずなのだが、今日はあまりいない。というか車で行く人間が多いようだ。特売か何かで多く買い込むかもしれない。

そんなことを考えていると信号は青に変わった。それと同時にカイは白と黒で構成された横断歩道へと歩き出す。

「これが、旅の始まりか」

詩人にでもなったかのように、カイは一人でに呟いた。それは他人に言ったわけでもなく、自分に対しての言葉。ここから長くなるであろう旅に屈しないようにと、自分に言い聞かせた言葉。

――と、そこでカイは横から車が走ってくる音を聞いてしまった。別に車がカイと同じ方向へ進むなら何の問題も無い。だから対して気にも留めなかったが

「きゃああっ」

女の甲高い悲鳴を聞くとただ事ではないことは明らかだった。すぐに音の方向を見てみると、車がカイへと突っ込んでくるところだった。曲がったわけではなく、どうやら赤信号を無視して来たらしい。飲酒運転か何かかもしれない。

この時代の車は、もちろん緊急時に停止することは出来る。だが、だ。慣性に逆らうことまでは不可能であった。そして止まるのは何かにぶつかってから。つまり轢き逃げ防止をするためだけのもの。

固い官職がわき腹に感じられたかと思うと、カイはすぐに空中に浮いていた。見えるのはただ、輝き始めた空。星が夜の始まりを告げているところだった。

（ああ、綺麗だな）

そんな感想を思いながら、カイはその頭を地面へと打ち付けた。

もちろん、意識は夜よりも深い闇に沈め。

旅（後書き）

感想待ってます

大人

カイが孤児院から約１０分後、光と希恵はリビングで夕食の準備をしていた。この時間帯ならいつもの風景で、何の取りとめもないことだった。なのに今日は違う。

「……」

光が物憂げなのだ。それも、カイが出て行ってからずっと。さっきまでのことだったのでそれは仕方ないのかもしれない、と希恵は思っていたけどその顔があまりにも暗すぎた。

（……恋をしていたわけじゃないと思うんだけど）

自分の娘が恋をしているなら希恵はすぐにでも見抜ける自信がある。自分の娘と子供達――ここに住む人間のことなら何でも分かると希恵は自負していた。もっとも、光が恋をしたことなどないので実績がないのだが。

光がいつもと違うのは気になる。料理なら今日はどうおいしく作ろうかと飽きずに考えられる子だ。それに考え付かないということもないだろう。なぜなら彼女は自分でインターねとでいろいろな料理を探し、気に入ったものがあればすぐに作ってしまうのだから。

「何かあったの？」

希恵は幼児たちに気を遣わず実の娘には何もしないなどということはしない。むしろ光には気を遣っていた。それは娘だからというよりも、光が幼児達の母役を半分になっているからでもある。彼女のストレスはきっと、希恵と同等かそれ以上なのだ。

だから何か困ったことがあるならすぐに訊く、手伝えることなら希恵は手伝った。この孤児院の発案者は光であり、希恵はあくまでサポートをしているようなものなのだから。

「……何でもない」

光はあくまで物憂げな表情を変えず、淡々とにんじんを切り刻んでいく。今日はシチューを作るそうだ。野菜が苦手な幼児たちにどうやって食べさせてあげるかを必死で思案しているが、考え付かない。そういうわけではなさそうだった。

「何でもないわけないじゃない。いつもより暗い顔をしているわよ？」

「今日はちょっと無表情なだけよ」

「じゃあ、何で？」

「今日は心を落ち着かせて料理をしたいから」

呆れを通り越して希恵は自分の娘を誉めたくなった。よくもまあ小学４年生でこんなことが言えるものだと、不覚にも感心してしまう。

だが感心している場合ではないとすぐに希恵は問いただす。

「料理は楽しくするものよ？　笑顔でやらなきゃ」

「心が落ち着いていないと怪我しちゃうわ」

……どうやら希恵は光に口での勝負には勝てないようだ。何とか勝つ手段がないだろうかと考えるが、希恵には思いつきそうに無い。

なので仕方なく直接訊くことにした。

「カイ君が出て行って寂しい？」

直接的であまりいい質問ではない。出来れば光自身に喋って欲しかったのだが仕方ないことだった。直接喋って欲しくば希恵はあと3年は修行しなければいけないからだ。

「……」

直接的な問いに、光は黙りこくってしまう。にんじんを切る音だけが鳴り響き、目に見えない闇が部屋を暗くしてしまう。窓から入り込んでくる光が徐々に弱まっている聖ではない。

「――怖いの」

けれど光はぽつりと、だがしっかりとした声でそう言った。搾り出すように、自分の恐怖を押さえつけるように。

「明菜お姉ちゃんみたいに、カイがどこか行って、死んじゃうかと思って」

明菜というのは、光の4歳上の少女だ。彼女は孤児院が出来る前にここに住んでいて、光と姉妹のようにいつも楽しく遊んでいた。彼女は家庭内暴力のせいで自分から家を出たらしかった。捨てられたのではなく両親を捨て、倒れていたところを希恵に拾われたのだ。カイと同じように。

最初は暗い表情だった彼女も、光と希恵と共に過ごしていくうちに明るい表情を取り戻していった。次第には笑顔を絶やさない明るい少女になっていた。何があっても笑っていて、誰に対しても優しく接することが出来る、文字通りいい女の子だった。

「親に、殺されちゃうんじゃないかと思って」

そんな明菜だが、彼女が12歳――光が8歳――のときに親元へと戻ってしまった。事実は連れ戻されてしまったのだが。彼女がここにきて数年立ったときのことだった。

明菜の父親はずっと探し回り、ようやくここに辿りついた。いかにもというその風体の男は、明菜を寄越せと言ってきた。

希恵に親権はない。さらに家庭内暴力の証拠はとうの昔に完治していた。どんなに粘ったところで明菜は家出少女と判断され、結局は親のもとへと戻るしかなかったのだ。

どうすればいいか、どうやったらあの子を救えるか。希恵はそれを模索していた。だが法という壁が、血縁がないというだけのことで彼女との縁を切られた。

黙って家を出た明菜は、書置きを残していた。それは「15歳になったら戻ってくる」という主旨のことだった。15歳になればいろいろな面倒な手間さえ踏めば親元から離れることは可能で、さらに親権を希恵に譲ることも可能だった。

もちろんそれは、3年間暴力を受けてその証拠を提示し希恵に親になってもらうという少女の夢だった。事実それは可能な範囲ではあったのだ。

だから彼女が死んだと聞いたとき、希恵は思わず泣き崩れてしまった。原因は殴殺、もちろん明菜の父親によるものだった。彼女が家に戻ってから1週間も経たないうちだったと思う。

本当の親子になろうと思っていた少女が、死んだ。亡骸すら帰って来なかったとき思わずこの世が地獄だと思ってしまった。あんまりだと、この世はおかしいと。

「だから、私は怖い」

光のいいたいとこは分かる。孤児院が出来るきっかけである少女

の死、それにカイは似ているかもしれなかった。滞在している期間はあまりにも違うが、雰囲気と親のことで問題を抱えている点は、まぎれもなく一緒に違いなかった。だから希恵と光は精一杯カイを引きとめようとしたのだ。

「……死なないよね？」

自分の娘が心の中で泣いていることを知った希恵は何も言えなかった。ここで下手にそうだわといったところで、逆効果になることは明白だ。

何もいえないのではないか、そしてまたカイが死んだという報が知らされてしまうのではないか。そんな不安が希恵の胸にも立ち込める。

（私は……自分の娘が、こんなにも娘が私にすがっているのに何も言ってやれない）

それで親が務まるなら、きっと明菜の父親でも出来たはずなのではないかと自虐する。今の自分はあの程度の男だと、貶める。

（この子も、ただの女の子だって忘れていた……！）

いくら精神的に成長しようが、あくまで小学４年生の少女でしかないのだ。そんな子が強いわけが無い。大人よりも出来た人間であるわけが無い。

だから大人は子供に示してやらなければいけない。導いてやらなければいけない。成長への道と。大人になる階段を――。

「光、今日はスーパーの特売日だったわね？」

思わぬ方向へと話がずらされ、光は目を丸く見開いた。

「材料が足りなくなりそうだから、買って来てくれない？」

「……材料はあるわよ」

まさかスーパーへ行って気分を落ち着かせてきなさい、といういうつもりではないだろうか。自分の母へと疑問と侮蔑の篭った視線を向ける。だが光の予想とは違う話に転がった。

「その途中で『偶然』にカイ君を見つけたら、今夜はおいしいシチューだから連れてきなさい。多く作るから」

今度こそ光は言葉を失いかけた。自分の母の言葉が、あまりにも意外すぎて。

数秒呆然とした光は、しかしその顔に笑顔を浮かべ始める。どうやら希恵の意図を察したのだろう。

「分かった、お母さん。帰りは遅くなるかも」

「8時になったら私も行くわ。特売日だもの、たくさん買いたいわ」

お互いがお互いの嘘に苦笑いを浮かべる。だがこれでいいのだ。これで間違っているはずが無い。絶対に。

「じゃあ行ってくるわ」

「行ってらっしゃい。道路には気をつけるのよ」

母の言葉を背中で受け止めながら、光はすぐに外へと駆け出した。靴が地面を叩く音を聞きながら、希恵は呟く。

「必ず連れて帰ってきてよね、光」

息を切らしながら光は街を走った、走った、走った。だがどこにもカイの姿は見えない。彼女はそれほど体力があるほうではないので３０分間走っていたわけではないのだが、それでも結構な時間探していた。

「まったく、どこにいるのよ……」

まだ分かれてから一時間も経っていないのでこの街にいることはほぼ確定的なはずだ。カイがすぐに隣町まで歩くとは思えない。何度かその足で食べ物はないかと探すはずなのだ。

「本当に、うちには迷惑かける子しか来ないわねぇ」

孤児院にいる幼児たちはあまりの元気にいつも希恵と光を疲れさせていた。それを迷惑だといっても、光は怒りはしない。むしろそれで楽しいからいいやと思っている。

けれどカイ捜索は少し苛立ちを覚えていた。せっかく探しているのに、どこをほっつき歩いているのだと。

スーパーには1度行ってみた。もちろん何かを買うつもりは無い。万引きでもしないかと思ったのだ。特売のビラはどこでも手に入るために金欠のカイならすぐに行くと思ったのだ。

だがいなかった。

寝るために公園に行ったのではないかと思ったがこの街の公園にはいなかった。

本当にこの街にはもういないのではないか。ならばもう光に探す手段は無い。最悪警察に捜索願を出せばいいかもしれないが、家族

でもないのに出せるだろうか。
そう考えていると、遠くのほうで救急車があるのを見た。どうやら交通事故で誰かが倒れてしまったらしい。
車ほど人を殺す機械は無いんじゃないだろうか、と呆れながらそこを通り過ぎようとした。別に救急車が自分の父が経営しているものだろうが、特に興味は示さなかった。けれど、群がってる野次馬の話はさすがに聞き捨てならなかった。

「銀髪の子だって」
「小学生くらいでしょ？」
「どうやら飲酒運伝で撥ねられたらしいわね……」
「かわいそうに、大丈夫なの？」

思わず今まさに担架に運ばれる人間の顔を見る。けれどシーツか何かによって顔が見えない。

「ちょっと待って！」

救急車の中に運ぼうとする救急隊員に無理矢理静止を呼びかける。救急隊員は何事かと呆然とし、そこを光はすぐにシーツを剥がした。

「なっ……」

救急隊員があまりに常軌を逸した行動に声を失うが、無視する。いそいでその死にそうな顔を見る。

「……カイ」

やはり轢かれた子供はカイだった。顔は青白く血でべったりとしていて、息も浅いが顔までは見間違えない。

「こらっ、何をやっているんだ！　さっさとその手を――」
「私も乗せて！」
救急隊員に向かって再度無理な願いを出す。だが今度ばかりは救急隊員は言葉を失わなかった。
「駄目だ！　命が関わっているんだぞ！？　君のせいで――」
「黄璃雷伽――それが私の父親の名前」
「あなた達の上司の娘よ？　手荒く扱うわけが無いわよね？」

大人（後書き）

結構好きな話に持っていきました。どうだったでしょうか？　楽しめてもらい田でしょうか。

感想待ってます！

ツイッターやっているので質問あればぜひ！

ｈｔｔｐ：／／ｔｗｉｔｔｅｒ．ｃｏｍ／＃！／ｍａｔｏｎａｋａｓｅｉｙａ

感情

「……ここは？」

真っ黒なその空間の中心で、カイは一言疑問を呟いた。けれどその問いに誰が答えるわけでもなく、その小さな声がこだまする様な事もなかった。

何かないかとあたり一面黒しかないものを見ていると、遠くから何かが見えた。眩しい、そう思ったときにカイは理解した。あれは太陽だと。

黒しかない空間を瞬く間に白く、温かくするそれはやはり綺麗なものだった。白銀に輝くそれはカイを照らし、まるで導いているかのようだ。

しかし、道が無い。太陽は一瞬のうちにカイの頭上まで昇りつめて、そこから動きはしなかった。

３歩右に動いてみた。もちろん太陽は動かない。１０歩動いてみた。太陽は微動だにしない。やけくそで１０秒程度走ってみた。太陽は知らん顔だった。

とにかく走ってみた。上空に見える太陽が少しでも動くようにとただただ走った。息は不思議なことに荒くならない。足も鉛のように重くならない。けれどそんな疑問をカイは持つことは無かった。ただただ走った。

太陽は動かない。カイを見下ろしてやるといっているかのように沈もうとはしない。

「道がないのにどこへ行けっていうんだよ……！」

カイは理解していた。自分はさっきから一歩も動いていないと。目印が無ければ自分が動いたかも分からない。辺りにはただ白しか

存在しないのだから。
だがふと気づいた。後ろを振り返ってみる。そこには黒があった。太陽があるのにも関わらず後ろは黒しか存在していなかった。
否、黒だけではない。眼を凝らしてみるとそこには住居のようなものが見える。それはどこか懐かしく、彼が戻りたい場所でもあった。
体は勝手に動いていた。光があたっている場所から黒――闇が支配している場所に踏み出していた。なぜかは分からない。誰かにここがどこかを訊きたかったのかもしれない。白に動いてもどこにもいけないのなら黒に進んで動きたかったのかもしれない。
太陽はようやく動いていた。それは自分が動いたからなのが太陽自身が動いたのかは分からない。ただ1つだけいえるのは、光が当たる面積が狭くなっているということだけだった。
太陽が無い場所では、しかし誰の存在も認められなかった。あるのは見たことがありそうな家と道路、遠くに見えるのは学校だけだった。
何もいなかった。彼はこの世界で1人でしかなかった。
怖い、寂しい。その感情が渦巻くのを感じながらカイは必死に人を、生きているものを、動いているものを探す。けれどどこにも見えなかった。

「――――――

十機爆弾を落としているところだった。闇しかない世界なのに、カイには何故か見えた。見せられているようだった。

一瞬で家が黒い炎によって焼かれていく。とたん悲鳴が聞こえた。どうやら家の中にはちゃんと人がいたようだ。けれどカイはそんなことに構っていられない。彼は今逃げていた。戦闘機による爆撃から、この世界から。

だがそれは適わなかった。家諸共焼かれて死んだであろう人が、どこからともなくカイへと迫ってきたのだ。ただれた皮膚、とろけた目玉がおぞましい。しかしそれを見ても吐き気はこみ上げてこなかった。

どうやら他の人間は殺しつくしたようで、全ての戦闘機はカイへと照準を合わせていた。さらに波のように迫ってくる人がカイを殺そうとする。

恨まれる覚えなど無かった。殺される理由が見つからなかった。しかしカイは直後知ってしまう。人が死ぬことに理由など、原因など必要ないのだと。ただ死ぬだけ、本当にそれしか答えは無かったのだ。誰もが意味に結果を結び付けてしまいがちだが、現実は結果にただ意味がぶらさがっているだけなのだと。

疲れもしない体でただひたすらに逃げる。家はやかれていて遮蔽物も無い。幸いなのが先回りされていないことか。先回りされていなければひたすらに逃げていればいい。

と、遠くに一軒だけ家がまだ存在していた。隣の家は跡形も無いのに何故その家があるのか分からなかったが、運が良かったのだろうとカイは適当に結論付けた。

ドアが開くと４０代くらいの男性がカイへと手招きしている。どうやら家に入って来いということらしい。核シェルターでもあるのかもしれない。

そこまでいけば勝ちだ。筋肉に物を言わせて必死に逃げる。機関銃が腕をかすめたり、どろどろとした腕が足を掴んだ感覚もあったがどうでも良かった。体があれば、命さえあればいいのだから。

カイの足に律儀にあわせている戦闘機も、しかしどうやらそろそろ本気を出すようだ。一機４発のミサイルを一斉に発射してカイを文字通り焼き払うつもりらしい。

息も上がらないカイだがミサイルほど早く走ることは出来ない。あと３０メートル程度で家には入れるのだが、どうやら追いつかれてしまうらしかった。

けれどドアの前にいる男は戦闘機など眼中に無いようで、必死にカイに呼びかけている。懐かしい声みたいだ、とぼんやりカイは思うがその必死さに報いようと最後の最後で速度を上げた。

ミサイルがカイを捉えるその一瞬、カイが家に入ろうとした瞬間、ドアが閉められた――

「はぁ、はぁ、はぁ……」

カイは男の家へと入れていた。ドアからはミサイルの爆発音らしいものが聞こえるが、決してドアが吹き飛ぶようなことは無かった。助かった、そう思って思わず床に倒れこんでしまう。わけが分からないがとにかく生きることが出来た。それだけで、彼は充分だった。

家の中は、やはりというか真っ暗であった。ここらへんには電気が通っていないのだろうか、そう疑問に思ったときに不意に電気がついた。

「ありが――」

とうございますと続けるつもりが思わず声を止めてしまった。なぜかは彼の視界に収まっている風景にある。

男と女がいた。その２人が誰かと争いをしていた。口ではなく、もちろん体で。相手は顔も見えないが、中年で丸々としたからだからどうやら男らしい。声も野太い。

「あぁ、ぁあ？」

どこかで見たような風景だった。それも数ヶ月前に。自分の人生で一番心に刻まれた、あのとき。

他ならぬカイが人を殺す前の光景だった。

よく見れば男と女はカイの両親であり、丸々太った男は彼が殺した強盗犯であった。そいつの右手にはナイフがしっかりと握られており、両親を殺そうと必死だった。

両親は必死で抵抗していたが、二人がかりでも押さえつけることはできていなかった。もともと彼の両親は体力も筋肉も大してない人間だ。火事場の馬鹿力というものが無ければおそらく中学生男子にも負けてしまうことだろう。

だからここで誰かが、カイが両親を救わなければ死んでしまうのだ。ナイフで刺されて。

しかしカイには出来なかった。なぜならそのあとの結果を知っているから。彼がここで救えば、彼は世界から省かれる。誰からも相手にされず、誰からも見向きされない、クソに成り果てるのだ。

なのでカイは願うしかなかった。どうか、なんとか両親が強盗を取り押さえてくれるようにと。

けれど祈りはむなしく両親は殺された。最初は父が腹に刺され、母は首を掻っ切られ、即死した。真っ黒な血が真っ黒な格好をした強盗を染めていく。

その眼がぎろりとカイに向けられる。狂気に満ちたそいつの右手には、さきほどと変わって木刀が握られている。

「オマエ、オレ、殺シタ」

抑揚の無い声で

「ダカラ、オマエ、同ジ様ニ、殺ス」

そう宣言した。右手には、カイの部屋にあったであろうその木刀。知り合いの老人に譲ってもらった高価な木刀。

それが振り上げられた。カイはどうすることも出来ない。ただ呆然と木刀を見ることしか出来ない。まるで金縛りにあってしまったかのように。

大の大人が木刀を振り下ろされたら相当な威力であった。まず頭蓋が割れた。脳みそがぐちゃぐちゃになって脳漿と血を撒き散らす。眼が飛び出た。そこから繋がる神経もパスタみたいにバラバラになる。歯は砕け下顎は木っ端微塵に粉砕した。

そこまで知覚してから、ようやくカイは悲鳴を上げた。何故かあげることができなかった。痛みも無いのに、口も無いのに、叫ぶことが出来た。それは感情による叫び、恐怖と悲しみ達が織り成す合掌

「うぎゃぁぁぁ

これは天井だ。

すぐに体を持ち上げようとするが全身に爆走した痛みがそれをさせない。痛い、感情ではなく普通に痛い。気持ち悪いくらいに、泣きたいくらいに。

そんな彼を覗き込む少女がカイに見えた。それは見たことある顔で、どこか心配そうであった。

「どうしたの？　うなされてたみたいだけど」

お決まりのセリフを吐く光は、やはり普通の人間だった。

「……」

光の顔を見て、カイはここがどこなのかを知ることが困難であった。眼が覚めたら別れたはずの人間がいるのが、余程彼にとって意外だったのだから仕方ないのかもしれない。先ほどの夢のこともあり、周りが明るいのも意味が分からないでいた。

「な、なんで――」

思わず体を起こして詰問しようとしたとき、体全体から鈍痛が疼き出す。すぐに体から力が抜け背をもう一度ベッドに倒してしまう。

「が、ぁあっ」

「ほら、無理しない」

光は大して慌てた様子も見せていなかった。彼女はこういう場面に幾度も遭遇しているために取り乱すようなことはないのだ、表面上は。

「いってぇ。……何があったんだよ」

「交通事故。あなた、撥ねられたのよ？」

交通事故という言葉を聞き、痛みに支配されている体で記憶を探ってみる。すると答えはすぐに見つかった。

「そうか！　あのときっ――っていってええ」

「大声出したら痛いに決まっているでしょう……って、こんな

大怪我したことないから分からないか」

カイの負った怪我は左脚、肋骨2本、右腕とほぼ重傷の類だ。いやそれも正しくは無い。さっきまで彼の意識は混迷しており、『重体』といわれるくらいにまで酷い有様なのだ。いつ死んでもおかしくない状況であり、この時代でなければおそらく良くて脳死ということだっただろう。

なのでそんな奇跡的な生還を信じれるわけも無く、つい数秒まえまでは光はカイが死んでしまうと思っていたのだ。それで意識を取り戻したのだ。嬉しくないわけがない。

あのときとは違って、命が助かったのだから。

「……で、何で泣いているの？」

苦痛に顔をゆがめながらカイは尋ねる。彼は自分が先ほどまでどのような状態に置かれているかを全く知らなかったために疑問に思うのは仕方ない。だがカイよ、さすがにもう少し何か考えられなかったのか。それでは少し光が可哀想過ぎるだろう。

「君が助かったからでしょっ」

思わず大きくなる声で光は答える。彼女はあくまで素直なのだ。嘘をつけない性格とも言えるが。

「さっきまで死に掛かっていたんだから」

「……ふうん」

普通なら驚きの声をあげるところだが、カイはあくまで平然としていた。彼にとってはそこまで驚くべきことではなかった。彼も夢を思い出し、それが何なのかを悟ったのだ。

（よりによって一番見たくないのを見せられたな）

あのとき見た、あのとき殺された男女は間違いなくカイの両親であった。息子という存在を愛し、ハヤテという個を否定した両親。もう二度と会いたくなかった。たとえ夢の中でも。

そう考えるだけでいろんな思いが胸まで競り上がってくるが無理矢理に押さえ込んだ。考えたくも無い、過去は変えられず、変えられるのは今しかないのだから。

最初から決まっていることなんて、ないのだから――。

「……驚かないんだ」

「へっ？」

「だから自分が重体だってこと」

「……予想ついてたし」

どうやって!?　と驚く光に詳細に説明するのが面倒だったので「なんとなく」と答えたカイ。一応見舞いに来てくれている人に対する礼儀くらいは身につけて欲しいものだ。

「……ま、無事で何より」

「ああ、そのとおりだ。無事ではないけど」

慣れない鈍痛にまだ顔を引き攣らせているカイとは対照的に光の表情は穏やかだった。窓から差し込んでくる夕陽が彼女の顔を朱色に染める。不意にカイは見蕩れてしまいそうに鳴ってしまった。似合うというよりは、あって当然ともいうべき光景。

「……生きてて、嬉しい？」

「……え？」

「だから、生きてて嬉しいかって」

そのまま止まって欲しいなと思っていたばかりにカイは動いた光に驚いていた。自分の顔は紅くなっていないよな、でもどうせ夕陽で分からないからいいかなどとどうでもいいことを考えていたこともある。

「……生きてて、嬉しいか」

生きる。それは誰もが勝手に縛られていることだ。この世に生まれてきたことに感謝して、という半ば洗脳のように言われ続けて人は生きることを肯定する。仕方なく、諦めて、誰もが未来はきっと明るいと思いながら生きていく。

それがどれだけ悲しいことなのかを、カイと光は知っていた。日常は簡単に壊れ、しかし壊れてすぐにまた日常になる。そんなわけの分からないのが人生。それを肯定し、見つめ、苦しい思いをしてでも進めるか。

また何かが起こりカイが殺人を犯す可能性を否定出来ない。だからこそカイはその質問に答えられなかった。未来に希望を抱くことが出来るのか。未来に裏切られても、それでも信頼することが出来るのか。

「――――嬉しくはないと思う」

やがてカイはそう答えた。嘘ではない。素直な気持ちで、思うが侭に彼は答えた。

「だけど、命があるなら生きるよ」

諦めたように、仕方なしとでもいうように、彼は言葉を紡ぐ。

「だって、生きたいから」

未来に希望を抱かず、絶望を抱いてそれをぶち壊したいから。未来に裏切られても倍返しにしてやりたいから。彼は生きるのだ。

「それに、救われた命だしさ」

そして言ってやりたい。こんな自分を救ってくれて、ありがとうと。それは運命に対してなのか、未来に対してなのか、はたまた拾ってくれた光に対してなのか。彼自身も分からなかった。ここのうちに留めておく言葉。きっと誰にも聞かれないであろう一文。

「……そう」

光は嘆息気味だ。どうやらその答えが気に食わないらしい。生きることにあまり前向きでないからなのかもしれない。光は生きたいのに死んでいった人を何人も知っているから。

それでも別にいいかと光は思う。どうせここからが本題なのだから。

「ねえ、カイ。ここが病室だってことはさすが分かるよね？」

「……おい、それはさすがに舐めすぎだろ」

「じゃあさ、この病院の名前は？」

「名前？」

そんなことをカイが知っている由も無かった。夢の中で生死をさまよったことくらいはさっしがついたが、まさか病院まで教えてくれるわけでもないだろう。全国の病院マニア（いるかどうか不明）ならまだしも、入院したことがなかったカイにはあまりにも酷な質

問だ。

「知るかよ、そんなもん」
「黄璃病院って名前」
「……それって」
「私の父親の名前」

カイはその答えに黙り込んだ。光のいいたいことがだんだんと見えてきたからだ。

動かない体、黄璃の父親の病院、そしてなにやら世話焼きな光。

この三要素から考えて一つしか答えは出ないだろう。

だからあえてカイは質問をした。ゆっくりとその答えを反芻し、自分が拒絶したことも思い出し、それでも、いいのかと

「俺は1人で生きたい」
「うん、それは別にいいとおもうよ」

光は否定しない。他人の行き方を彼女は否定しない。

「でも、今の君じゃ1人では生きていけない」

カイは弱かった。あまりに脆くて今にも崩れてしまいそうだ。だから、だから

「だからさ、また私の家に行こうよ」

だから、その提案があまりにも魅力的に感じられてしまう。

「……」

そんな提案を、受け入れればどれほど辛いことか。かつてまた自分が経験した悪夢を、再現されるのではないだろうか。

自分は悪くないのに、ただ1つの選択肢を誤っただけで信頼は粉砕され、消えうせる。そんな思いはもう味わいたくない。

「うん、よろしく」

けれどカイはその提案に頷いた。これからの未来がどれほど辛く悲しいことだけで詰まっていることが分かっていても、彼は首肯した。

黄璃光が、裏切る。そんな未来が彼には見えない。いや彼はこうも思っているはずだ。自分を救ってくれた奴に、裏切られてもいいと。

「怪我しているから世話ばっかかけるかもしれないけどな」

茨の道だ。その瞳に移るのは悪夢だけだ。けど、もしその道を越えたならば、『光』が見られるのではないかと。期待した。

「……分かった。じゃあ、これからよろしく」

光が手を差し伸べる。その顔にはとびきりの笑顔を。

「ようこそ、夢の道（ドリームロード）へ」

こうして、カイの物語はようやく始まった。その未来に、一縷の期待を寄せて。

プロローグ

風が舞った。街中に存在する紅葉が空に舞い上がり、夜の町並みを彩る。

火が爆ぜた。舞った紅葉が焼き消され、灰となって風に運ばれる。

聞こえるのは剣戟。鳴り響く鉄の音は協奏曲のそれ。火花が塵、風と火にかき消される。

一瞬、双方が止まる。肩で息するのは一方のみ。もう一方はただ笑みを浮かべるだけ。

再度刀が打ち合う。だが相殺ではない。一方が打ち負ける。

しかし負けじと切り返し、振るわれた刃が斬り飛ばすのは相手の首。

飛ばされるはずの首、飛ばずにただひらりとかわす。

陽炎のようなそれは、すぐに体勢を立て直し切りかかる。

反撃は一瞬、二刀の突きは相手を抉る。

苦渋の表情、それを眺めるは光の無い瞳。ただそれが三日月を描き笑みを浮かべる。

刀を無視して後退。傷が開く。血は出ず粒子だけが飛び散る。

傷を負った者、敵から苦れようとする。

それを見て、笑うもの、ゆっくり追っていく。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4233v/

疾風の軌跡

2011年11月27日18時51分発行